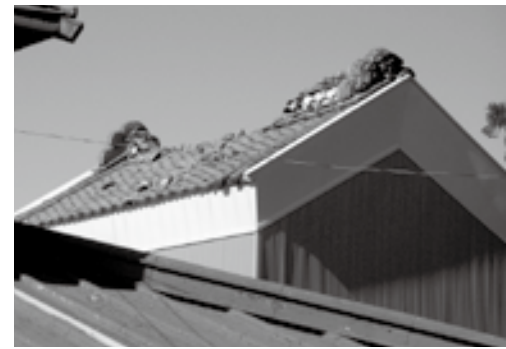


地震発生から数日後、新たな混乱が発生しました。ガソリンをはじめとした燃料が不足し、在庫を切ら



杉戸町を

襲った

震度5強

の揺れ

3月11日、杉戸町は震度5強の激しい揺れに襲われました。横揺れが長時間にわたって続き、町内各地で屋根瓦の損壊、塀の倒壊などが確認されました。幸い地震による死者・行方不明者はありませんでしたが、水道配水施設の送水圧力低下により、町内のほぼ全域で断水が発生しました。

地震発生から数分後、家族の安否確認のため携帯電話などの使用が集中し、しばらく通話ができない状況が続きました。そして帰宅ラッシュの時間帯にさしかると、幹線道路は軒並み渋滞。鉄道などの公共交通機関は不通で、勤務先や学校などから帰宅できない「帰宅困難者」「帰宅難民」を経験した方も少なくないと思

います。地震発生から数日後、新たな混乱が発生しました。ガソリンをはじめとした燃料が不足し、在庫を切ら

る必要があります。適切な方法で情報を収集する必要があります。



特集 東日本大震災から

私たちが学ぶべきこと

津波に襲われた市街地 写真提供/福島県富岡町

友好都市である福島県富岡町の中心部。瓦礫に覆われたこの道路の先には、JR常磐線富岡駅がありました。地震発生直後、この駅前通りである県道163号線にも大津波が押し寄せ、穏やかだった日常の風景は一瞬にして失われてしまいました。間もなく、東京電力福島第一原子力発電所事故が発生。放射線による警戒区域に指定された富岡町全域は、現在も一般の立ち入りが厳しく制限されています。

(この写真は、地震発生当日の3月11日、津波に襲われた直後の市街地の様子を富岡町職員により撮影されたものです。)

平成23年3月11日14時46分、宮城県沖を震源とした東北地方太平洋沖地震が発生し、かつてない激しい揺れが各地を襲いました。この巨大地震は、観測史上最大規模のマグニチュード9.0を記録し、広範囲にわたって甚大な被害をもたらしました。

東日本大震災による被害は、死者1万5,845人、行方不明者3,339人(2月1日現在、警察庁発表)。その多くは、地震直後に発生した津波による被害です。津波は海岸に近づくほどその高さを増し、想像を絶する力で街を破壊して多くの尊い命を奪いました。そして、1年たった現在でも、被災地は瓦礫の処理など多くの課題を抱えています。

津波は、市街地だけでなく東京電力福島第一原子力発電所を襲い、電源喪失によって原子炉の冷却機能を奪いました。制御不能に陥った原子炉は、広範囲に放射性物質を拡散させ、今なお緊迫した状況が続いています。

また、地震の激しい揺れによって、大規模な液化化現象も起こりました。その被害は臨海エリアにとどまらず、内陸部である埼玉県内においても発生しています。建物や道路、上下水道などの都市機能が破壊され、復旧には多額の費用と時間を費やしています。

近い将来、首都圏で大地震が発生する確率が非常に高まっていると、地震の研究機関によって発表されました。しかし、天気予報とは違い「いつ・どこで・どれくらい」の地震が発生するかを予測することは非常に困難です。東日本大震災から1年、地震の恐怖を目のあたりにしている私たちが、今やるべきことは何なのでしょう。大切な人を地震から守るため、私たちにできることを一緒に考えてみましょう。

※『東北地方太平洋沖地震』は、3月11日14時46分に発生した「地震」そのものの名称です。この地震(余震)によって引き起こされた、津波、原子力発電所事故、液化化現象など、それらの被害を総称して『東日本大震災』と呼んでいます。

あの日の記憶を「記録」に残したかった…

高野団地「常盤会」が震災体験文集を自主制作

高野団地(大字下高野)の老人クラブ「常盤会」は、昨年6月に震災体験を綴った文集『東日本大震災 マグニチュード9.0の体験 その時あなたは』を自主制作しました。会員38名のうち、25名の体験記をまとめたもので、昨年4月の総会後に開催した懇親会の席で、震災の体験談が飛び交ったことをきっかけに、この文集の制作を決定しました。

文集には、「あの日の恐怖は一生忘れられない」「地震の後もしばらく船酔いのようなだった」「緊急地震速報の音を聞くと胸が苦しくなる」など、震災当時の体験が率直に記されています。

会長の寺田亮さんは、「記憶は時間とともに薄れる。記録に残して後世に伝えることに意味がある。」と語ります。



高野団地老人クラブ「常盤会」 会長ご夫妻 寺田 亮さん・タミさん